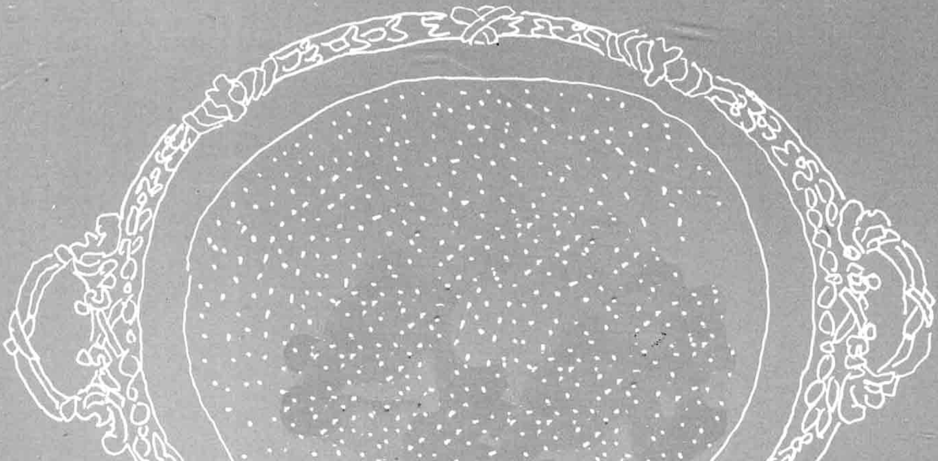
天皇の料理番

杉森久英

天皇の料理番

杉森久英



読売新聞社

天皇の料理番

昭和五十四年十二月二十五日　第一刷

著　者　杉森久英

編集人　笠井晴信

発行人　原　四郎

発行所　読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇

大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇

北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

© Hisahide Sugimori, 1979

0093-702780-8715　定価一、三〇〇円

天皇の料理番　目次

胸に燃える火…5　天まであがれ…30
負けじ魂…54　フランス熱…96
堪忍袋…132　新ジャガ…162　セーヌ川のほとり…198
雲の上…252　戦争のあとさき…331

装丁　三井永一
題字　中村　哲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

天皇の料理番

胸に燃える火

1

小さいときから、強情な子だった。

何かほしい物があると、手にいれるまであきらめない。あばれる。わめく。

しかっても、なだめても、代りに何かほかのものをやろうといっても、どうしても承知しない。望みのものがきまっていて、ほかのものでは駄目なのである。

この子供が、十のとき、坊主になりたいと言いだした。

親たちはびっくりした。次男坊だから、家をつがせる必要はないけれど、坊主とは情ない。坊主は出家といって、ふつうの人の仲間いりできない職業である。むかしの本にも、「法師は木の端」といって、人間の中にかぞえていない。

まさか、十くらいで、世の無常を悟ったとか、発心したとかいうわけでもあるまいと、いろいろ聞いてみても、本人もうまく答えられない。

実は、本人は坊さんのスタイルのよさにあこがれたのであった。小学校の同級に、お寺の小僧をやっているのがいたが、ふだんの立ち居振舞いがきれいで、上品にみえた。法事か何かで、老師のあとについて、しずしずと町をあるく姿など、画に描いたように気高くて、自分もあんな風にしてみたいというのが、ほんとの動機だった。

いったん坊さんにあこがれると、矢も楯もたまらない。どうしても坊さんになるといって、きかないのである。

両親は困り果てた。家が貧しくて、食い扶持を減らすために寺へやるという話はよく聞くが、何不自由なく暮しているのに、なにも坊主にすることはない。

そこで父周蔵が菩提寺の住職のところへ相談にゆくと

「それは奇特なことじゃ。そんなに小さいうちから一心に思いつめるのも、仏縁というものじゃろう。聞けば、大変利発なお子じゃということだが、いまに名僧にならんとも限るまい」

修行がつらいぞといって、思い留まらせてくれるかと思ったら、逆に、火に油をそそぐようなことを言う。

「それでは、よろしくお願いします」
というと
「うちは真宗じゃが、修行には、禅宗の方がいいかも知れん」
といって、懇意にしている禅寺へたのんでくれた。町はずれの山の奥にある由緒深いお寺で、町の人は「山の寺」といっている。
いよいよ坊主になるときまれば、得度式をしなければならない。本尊の釈迦如来像の前にかしこまって、読経、礼拝のち、師匠から頭をそってもらうのである。そこではじめて、法名をもらい、袈裟をかけて、本物の坊主ということになる。
白衣をつけ、本堂の真ん中にすわって、合掌瞑目していると、金襴の袈裟をつけた住職の唱導で、両側に佇立した衆僧の唱和するお経が、腹の底まで沁み入るようである。ゆるやかに流れる香煙は、五色の雲に似て、このまま極楽へ運ばれるかと思われ、甘く悲しい法悦の涙が、あたたかく頬を濡らす。
夢心地のうちに儀式が進んで、いよいよ剃髪という順序になった。住職のカミソリが頭に加えられると、突然子供がわめきだした。
「痛い痛い。こんな痛いことをするなら、坊主はいやじゃー」
立ち上ると、本堂を走り出て、山門を抜け、長い参道を駆け通して、家へ帰ってしまった。
あとは大騒ぎである。得度のカミソリが痛いといって逃げ出した小僧なんて、前代未聞である。寺から親の家へ使者が来て、どうしましょう、と相談がはじまった。
周蔵は、はじめは子供の出家に反対だったくせに、ここまで来てやめるといわれては、あちこちへ義理が立たないと
「和尚さんによくおわびして、早くお寺へ帰らせてもらえ」
といったが
「もう坊主はいやじゃ。あんな痛いことされるのは、かなわん」
と、いっかな承知しない。そこで家じゅう総がかりで押えつけておいて、周蔵がむりやり頭をそってしまった。
丸坊主になればなったで、さっぱりして、風通しがよく、すがすがしい気分である。もともと坊主姿にあこがれていたのだから、悪い気はしない。急に機嫌を直して寺へ帰った。
法名は篤有といった。本名の篤蔵の「篤」をとったものである。

篤有にとって、寺の生活は、それほど苦しいものではなかった。もともと丈夫な生まれつきで、キビキビ動くことがきらいではないし、一時もじっとしていられないたちだから、仕事の多いのは苦にならない。

朝は四時に起きて、井戸端で顔を洗うと、衣を着て、本堂でお勤めをする。これを朝課という。

朝課のあとは朝飯である。おカユと味噌汁、それに香の物という質素な献立てだが、そのころの日本の食生活は、どこへいってもその程度のもので、それ以上は贅沢とされていたから、お寺だけが粗食というわけではなかった。

味噌は自家製で、年に一度、大きな桶に仕込むのだが、商売のものとちがって、まぜ物をしたり、手を抜いたりしないから、正真正銘のうまい味噌になる。ほかに何のおかずがなくても、味噌汁だけで満足できる。

朝飯がすむと、弁当を持って学校へゆく。篤有の上には兄弟子が三人いるが、みんな卒業していて、学校へゆくのは篤有だけである。四年までは義務教育だから、やめるわけにはゆかない。義務というより権利だといった方がいいかも知れない。

学校から帰ると、兄弟子がお経の読み方を教えてくれる。「舎利礼文」とか「般若心経」とか、いろいろあるけれど、全部漢文の読み下しで、意味もなんにもわからない。わからなくてもなんでも、おぼえなければならないので、必死になっておぼえようとする。はじめのうちは、なかなかおぼえられないが、繰り返しているうちに、だんだんおぼえてくる。篤有は根が頭のいい子だったとみえて、上達は早かった。

お経の稽古がすむと、習字である。坊さんは、字が下手ではいろいろ困ることがある。戒名をたのまれたって、あまりヘタクソの字では、恥かしい思いをしなければならない。それで、習字はやかましく仕込まれるのだが、篤有はこの方にも素質があったとみえて、和尚にほめられることが多かった。

夕飯も質素なものだった。朝と同じおカユと味噌汁のほかに、豆腐か油揚げ、芋、コンニャクなどの煮た物が一品よけいにつくだけである。

たのしみは、和尚のお供をして、檀家の法事などに招かれたときである。和尚の隣にすわらされて、和尚と同じように、二の膳つきのご馳走を頂戴する。湯葉、タケノコ、飛竜頭、椎茸、シメジ、菊ナマス、ゴマ豆腐など、ふだんの惣菜にないものがいろいろとならんでいるのも、たのしみだし、キンカンの甘露煮とか、花ミカン（ミカンを横に切って、断面を菊の花のようにしたもの）やリンゴ、レンコンの甘酢などをにぎやかに盛り合わせた一皿も、食欲を満足さ

せる。
もっとも、和尚はおよばれがしょっちゅうあるけれど、小僧はたびたびご馳走になれるわけではない。和尚がひとりで出かけることもあるし、兄弟子がお供をすることが多く、一番下の小僧にはなかなか順番がまわって来ない。
しかし、底辺の人間は底辺なりに、生活の知恵をはたらかせて、けっこう栄養補給の道を発見する。
ときどきお賽銭の中から二銭、三銭と持ち出して、里の駄菓子屋で買い食いをする。飴玉なんか、明治のそのころ、一銭に十個もくるから、けっこう育ち盛りの食欲を満たすことができる。
和尚さんだって、気がついているかも知れないが、知らぬふりをしている。和尚さんだって、小僧時代にやったかも知れないのだ。なにも知らないだろうと思うのは、子供だけである。
「山の寺」という名前の通り、麓から山門までは、崖づたいに八丁（一キロメートル）の山道がうねうねと続いている。両側は杉の大木が生い茂っていて、昼でも暗く、ひんやりした空気が流れている。
この八丁の崖道に、八十八体の石地蔵が、一定の間隔で立っているが、ある信心深いおばあさんは、参詣のたびに、この地蔵さまの一体ごとに、線香をあげ、コンペイ糖を二、三粒ずつおそなえして、拝みながら、登ってくる。
山の上から、おばあさんの姿が見えると、篤有は
「それっ」
と仲間の小僧といっしょに、裏道づたいに駆けおりて、おばあさんの供えたばかりのコンペイ糖を、片端から頂戴する。二、三粒ずつでも、八十八の地蔵さまから巻き上げるのだから、両手に持ちきれないくらいである。
「仏罰がおそろしいぞ」
と、仲間はすこしおびえ気味だが
「なんの。地蔵さまはおばあさんの気持ちを充分召し上ったあとやから、これはヌケ殻や。ほっといても、キツネかタヌキの腹に入るだけや。わしたち仏弟子の身体の養いになるほうが、よっぽど功徳になるわい」
といって平気である。
このおばあさんは、篤有の村の警察署長の家の人である。署長さんは、もと武生藩士で、殿様の武術の御指南役を勤めたとかいうことで、立派な髭をはやした、いかめしい人だが、おばあさんも、もと武士の妻女らしく、人をそばへ寄せつけぬような、凛とした気品を持っている人である。
このおばあさんの孫娘、つまり署長さんのお嬢さんの八千代さんという人が、篤有と同じ小学校の一年下の級へか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

よっている。
篤有の村は、いまは武生の市へ編入されてしまったが、もとは日野川をへだてた周辺の農村の一部で、住んでいるのは、土地に根をはやした百姓ばかりである。その中で、唯一の外来者である警察署長の倉島権太夫一家だけ、士族らしい威厳のある暮らしぶりをしているので、村人の畏敬の的になっている。
たとえば、村の小学校の生徒は、ふだんつぎはぎだらけの短かい着物の着流しに、冷飯草履をつっかけて登校するが、署長さんのお嬢さんは、いつも小ざっぱりした着物に、キチンとひだのついた赤い袴をはいている。
髪はオタバコ盆に結い、赤いリボンで結んでいる。うちでは、赤と紫の花模様のチリメンの被布を着ている。東京の雑誌の口絵に描いてある通りの姿で、一面の野菊の中に咲いた一本の白百合のように、気高く、清らかな風情である。
八千代さんの顔がまたいい。父親の署長さんは、仁王さまにウルシをぶっかけたような、こわい顔をしているのに、どうしてあんな子が生まれたかと、みんなふしぎがるほど、やさしくて奥ゆかしい顔立ちである。
むきたてのウデ卵のように白くて、キメのこまかい皮膚に、すんなりした眉、黒くてつややかな瞳、すっと通った鼻筋、あざやかな血の色の透けてみえる唇……すべてが典型的な美人の相である。
それに、彼女の何よりの魅力は、目もとと口もとにほのかに漂っている、おっとりした微笑である。おそらく本人は意識せず、心の底にたたえられたやさしさ、人なつこさが、自然と外にあふれ出たものであろうが、この微笑に接すると、どんな心のねじけた人も、思わずほほえみを返さないではいられないだろう。
八千代さんは篤有より一級下だから、いっしょに遊んだこともないし、口をきいたこともない。しかし、小さな村の小学校のことだから、日に何度も、休憩時間に廊下の曲り角ですれ違ったり、運動場で会ったりする。
篤有は八千代さんに会うごとに、胸がドキドキして、背筋を電気のようなものが走り、膝がガクガクして、その場へしゃがみこんでしまいたくなる。まさか、そんなみっともないまねはできないから、彼は膝と腰にウンと力をいれて、歯を食いしばり、わざと八千代さんを無視して通り過ぎるのだが、胸の中は火事場のような騒ぎである。
そういう彼の心に気がついてかつかないでか、八千代さんはいつもやさしい笑顔を篤有にむけながら通りすぎるのだが、彼は、もしかしたら八千代さんはわしのことを嫌っていないのではないかという気がしてならない。

しかし、篤有はまだやっと十歳である。十歳の子供が、胸の中でどんな熱い思いを燃やしても、誰もまじめに相手にしてくれないだろうと思うと、彼はますます悲しくなった。

八千代さんのおばあさんが、地蔵様におそなえするコンペイ糖を、横から盗み取る彼の心理は、こういう悲しい気持ちと無関係のものではなかった。子供心にも慕わしいと思う人に縁のあるおばあさんのコンペイ糖だからこそ、盗みたくなるのである。甘いものがほしいとか、いたずらをしてやろうとかいうだけの動機ではなかった。女の人の身体につけるものを盗みたがる変態男の心理とも、どこかで通ずるものがあった。

お婆さんはいつも、一人でお参りに来たが、ある夏の暑い日、珍らしく八千代さんをつれて、やって来た。ちょうど夏休みで、八千代さんがうちにいたから、途中の話し相手に、つれて来たのであろう。

山の上から目ざとくみつけた兄弟子が

「篤有、コンペト婆さんが、また上って来るぞ。今日は女の子をつれとるらしい。さあ、早くいって、コンペ糖を頂戴しよう」

いつもなら、皆まで聞かずに

「よし来た」

と駆け出す篤有が、今日は

「いやや」

といって、動こうとしない。

「どうしてまた、今日はいやなんや？」

「どうしてということもないけれど、今日はいやや」

「長者のいうことを聞かんと、どんなことになるか知っとるか？」

兄弟子は腕まくりして、拳固をつき出した。禅寺は、相撲取りの世界や軍隊と同じで、兄弟子が絶対の権力を持っている。服従しない者には、制裁あるのみである。

兄弟子が拳固を振りかざして、近づこうとすると、篤有は学校へ持ってゆく筆入れの中から、鉛筆削りの切出し小刀を取り出した。逆手に持って

「やるか？」

身構えたので、兄弟子はひるんで

「これ、刃物はいかん。あぶない……」

「あぶないも糞もあるか！　さあ来い」

「これ、あぶないというのに……」

青くなって逃げ出したのを、廊下の隅に追いつめて

「こんどから、わしの言うことを聞くか？　どうや？」

「聞くさかい、かんべんしてくれ」

女性問題がからむと、弱者も逆上して強者になるとい

う、人間心理の機微を知らなかったのが、兄弟子の失敗のもとだった。

2

山の寺の小僧生活は、篤有にとって、それほどつらいものではなかった。

禅寺には女がいないので、一般の家庭で女の仕事とされている炊事、洗濯、裁縫、拭き掃除などのほかに、男のやる力仕事もやらなければならないけれど、若くて活力にあふれている篤有にとっては、それほど骨の折れる労働ではなかった。

篤有は気性の激しい子で、いろんなことによく気がつき、素早く反応して、パッと立ち上るので、いつも人の先に立った。一番年下のくせに、万事兄弟子より先に出ようとするので

「出しゃばりめ」

とにくまれたが、コンペイ糖のことで兄弟子を小刀で追い回して以来、主導権を把握したので、無茶ないじめ方をされることはなくなった。

それどころか、兄弟子の方で篤有の顔色をうかがうようになった。何しろ、どんなえらい人のいうことでも、気にいらなければ

「いやや!」

といって、テコでも動かないので、あらかじめ御機嫌を打診してからでないと、物事がはじまらなかった。

学校でも、篤有のいたずらは激しかった。受持ちの先生が、親を呼び出して注意しようとしたが、呼び出し状を篤有に渡しても、うちへ届けるはずがないので、近所から通っている子にたのんだ。

それをかぎつけた篤有は、途中で待ち伏せして、取り上げようとした。

子供はこわくなって、道ばたの桑の木へ逃げ登った。篤有は

「ようし、見ておれ!」

というと、近所の肥料溜めから人糞をはこんで、桑の根のまわりに積み、幹にも塗りつけた。子供は下りるに下りられず、泣きだした。

こんなことをしているものだから、寺へ帰るのがおそくなる。暗い道をトボトボ辿りつくと

「今まで、どこで遊んどった?」

と、和尚さんの小言がはじまり、しびれの切れるころ、ようやく皆よりおそい晩飯にありつくというわけである。

寺のうしろの崖をのぼったところに、代々の住職の墓が立っている。寺は応永二年(一三九五年)の開基だから、現

在にいたるまで三十何代になり、それだけの数のお上人様の墓がならんでいる。この寺でもっとも神聖な区域である。

三十いくつかの墓はみな、篤有の胸の高さで、ラッキョウをさかさに立てたように、上の方が丸くふくらみ、下の方が細くなっているので、頭でっかちに見える。おそらく台座に固定してあるのだろうけれど、ちょっと押せば倒れそうに見える。

篤有は、この墓の形が気になってしようがない。なぜこんな形にしたのだろう？　重心が上にあるのは、自然の理に反している。なんとなく、見る人の心を落着かなくさせる。まるで、押したら倒れるかどうか、試してみろといわんばかりではないか。

ある日、篤有は誘惑に抗しきれず、中の一つを手で押してみた。

はじめのうち、墓はビクともしなかったが、何度も押すうちに、かすかな手ごたえが感じられるようになった。

一定のリズムで、反動を利用しながら、たびたび繰り返すうちに、手ごたえはますます大きくなり、やがて気味のわるいほど揺れだした。

最後の一押しで、墓石は台座をはなれると、まっさかさまに落ちていった。

崖の下は竹藪である。墓石は竹の幹にぶつかって、カラン〳〵と音を立てた。

――ハハア、どんな重いものでも、反動を利用して、たびたび押せば、動くんやな。

篤有は、物理学の偉大な法則を発見したような、愉快な気分になり、もう一つ、また一つと、つぎつぎに倒していった。

このことが、寺の大問題になった。

お賽銭をくすねたとか、コンペイ糖をちょろまかしたとかいうのとは、問題がちがう。

寺の神聖がけがされたのである。法難である。

まさしく極悪非道、罪業深重、仏敵の所業である。

さっそく父周蔵のところへ使者が立って

「因縁がなかったものと思いますから、破門します。さっそく身柄を引取っていただきたい」

と申入れがあり、未来の名僧智識の夢は、一年あまりで消えた。

寺を追放されて、親の家に帰った篤有は、もとの篤蔵にもどったが、相変らずいたずらを続けていた。

あるお天気のいい日、篤蔵は何かおもしろい事はないかと、いたずらの種をさがしながら、村の道をあるいてい

た。

道からすこしはなれた藪の中に、人の気配がする。すかして見ると、村はずれの掘っ立て小屋に住む乞食じじいが、野糞を垂れているのだった。青天井を眺めながら、無心の快感にひたっているらしい。両足の間には、このあいだ篤蔵が突き倒した石の墓とよく似た形のものが、ぶら下っている。こんどは重心はたしかに下である。

篤蔵はそれを見ると、突っついてみたくなった。こういう形のものを見ると、突いてみたくなる本能が、彼の内部に潜在しているらしい。

彼はそこいらから竹の棒を探してくると、気づかれないように忍び寄って、エイとばかりに突きだした。

降って湧いた事故に、乞食じじいは、驚いたのなんの

「ひやッ！」

と叫んで、自分の垂れたものの上に尻餅をついた。

次の瞬間、彼は加害者を発見すると、猛然と襲いかかった。

篤蔵は一目散に逃げ、どうやらつかまらずに、自分の家へ飛び込んだ。続いて乞食が飛び込んで

「さあ、この家のあくたれ息子を出してくれ。これから警察へつれてゆく」

とわめいた。周蔵が出て

「じいさん、かんべんしてやって下され。こうして、手をついてあやまるさかいに……」

篤蔵の父は、ふだんからこの男に食い物や金をめぐんでやっている。乞食はちょっと困った顔をしたが

「旦那さん。ふだんはふだんや、今日は今日や。おらはどうしても勘弁ならん。これまでに貰うたものは、みな返すかわりに、息子さんをつれてゆく」

篤蔵は納戸の隅にかくれて、小さくなりながら、乞食のわめき声に耳をすましていた。

つれてゆかれたら、警察へ突き出されるだろう。警察はこわくないが、署長さんは、あの女神のような八千代さんのお父さんである。お父さんの前へ突き出されれば、当然八千代さんの耳にも入るだろう。それくらいなら、死んだほうがいい……篤蔵は納戸の隅でふるえていた。

乞食は、その日はあきらめて帰ったが、あくる日もまたやって来て、あくたれ息子を出せとわめいた。よっぽど腹が立ったものとみえる。

この分では、うっかりしてつかまると、どんな目にあわされるかわからないというので、篤蔵は一週間ばかり、武生の町の姉の嫁ぎ先にかくまってもらった。この家は駅前に手広くカラカサ屋をやっていて、奥行きが深かったから、篤蔵は隠れおおせることができた。

十一の春、篤蔵は小学校の尋常科を卒業して、高等科へ入った。そのころは尋常四年までが義務教育で、貧しい家の子は、それから先は家業を手伝ったり、奉公に出されたりしたが、高浜家は村の旧家だから、すぐ働きに出る必要がなかった。

高浜家は旧藩時代、十村を勤める家柄だった。十村とは、近隣十ヶ村の取締りをする役で、他藩で大庄屋とか惣庄屋とかいわれるものに当る。ふつうの庄屋より格が一段上で、いかめしい長屋門を構え、白壁の塀にかこまれた屋敷の中で、豊かに暮らしていた。

しかし、篤蔵は次男だった。そのころの相続制度では、どんな大きな財産でも、すべて長男が継ぐ権利を持ち、次男以下はビタ一文ももらえなかった。たとえいくらか分けてもらえるとしても、それは恩恵としてであって、権利としてではなかった。

長男の周太郎は、秀才の評判が高く、東京の大学で法律を勉強している。いまに弁護士にでもなって、郷里へ帰り、開業するつもりだろう。

そうなれば、篤蔵はこの家を出てゆかねばならない。いつまでも厄介者でいられない。

はて、何をしようか？

学問をして、役人か、会社員にでもなろうか？　学校の教員にでもなろうか？

彼は頭はそう悪くないという自信はあるけれど、じっとして本を読んだり、字を書いたりすることは、大きらいである。

教室で授業を受けていても、窓の外で鳴く鳥の声や、セミの声、犬の鳴き声などが気になってしようがない。

川で魚を釣ったり、泳いだり、トンボやバッタを追っかけまわすことなら、一日じゅうやっていても、あきないが、すわって勉強することはどうも苦手である。

しかし、自分はいまにこの家から出てゆかねばならぬ身の上である。そして、世の中を渡るには、何か技術を身につけねばならないのだということだけは、痛いほどよくわかっていた。彼が以前、坊さんになろうと思ったのも、そのスタイルのよさにあこがれたという理由のほかに、何かで身を立てねばならぬという気持ちもあったからである。

ある日、大阪へ嫁にいった伯母が里帰りに来た。

「大阪て、どんなところや、伯母さん？」

少年の問いに

「そりゃ、にぎやかな処や。京の着倒れ、大阪の食い倒れというて、おいしい物が山ほどある。金さえあれば、食い放題や」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com